陰トピアと遊ぼう

一華天竺

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

これはとある学校での物語。

ある日、佐倉牡丹はとてつもなく臆病な女子生徒ビカラと出会う。

そんな彼女とただ、ただ、遊ぶ物語。

目次

陰トピアと出会う ―― 1
陰トピアと話そう ―― 5
陰トピアと部活動その1 ―― 10
陰トピアと部活動その2 ―― 14
陰トピアと部活動その3 ―― 17
陰トピアとトランプ ―― 20

陰トピアと出会う

「そ、それはダメです・・・・・・」
「諦めろ、ほら、俺の勝ち」
「ひぃぃぃぃ・・・・・・・！」
教室には2人、少し薄暗い空間で机を囲んでいた。1人は背の高い男子生徒、もう1人は小柄な女子生徒。随分と凸凹とした2人である。
「う、うぅ。また負けた。これが、陽キャの力・・・・・・？」
「いや、ビカラが分かりやすすぎるだけだぞ」
そんな2人は今、トランプで遊んでいた。種目はババ抜き。2人でババ抜きをしているのである。
「これで10連敗・・・。うう、鬱い・・・」
「もう遅いし、そろそろ帰ろうぜ」
「そ、そうですね・・・。すみません、私なんかと遊んでいてもつまらなかったですよね・・・・・・」
この少女はとにかく卑屈である。自分に自信がなくて、人との関わりに慣れていない。
自分を『陰トピア』の住人と言い、陽キャラに憧れている少女なのだ。
「なわけあるか、ビカラと遊ぶのは楽しいよ。だから卑屈にならない！陽キャになるんだろ？」
「そ、そうです。陽キャになるんです。うぇ、うぇーい・・・・・・」
「いや、声ちっさ」
これはそんな『陰トピア』の住人である彼女と遊ぶ物語。

◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇

その少女はいつも涙目だった。出会いなんて鮮明に覚えている。
4月、新入生が入学し、自分が進級をしてしばらくたった日だ。その日は適当に歩いていた。

一緒に食べている友人たちは、呼び出しとか、委員会の仕事とかがあるために全員いなかった。本日は1人である。ならば気分でも変えようかと思い、いい昼食をとれる場所を探していた。

「行ったことない場所ってあったか？」

こんな事を考えながら歩いていく。一つだけ思い当たる場所があった。

旧校舎だ、部活動とかで使う旧校舎。少し古びた建物となっているが、今でも部員の少ない文化部とか、運動部の部室とかに使われてはいる。まぁ、それでもあまり使われていない場所ではある。

勝手に使っていいかは分からないが、とにかく行ってみることにした。

なかなかに雰囲気がある場所だ。少しワクワクしながら、歩いていく。

行ったことない場所を歩くのは心が踊る。探索を優先して、昼食を食べるのを忘れそうである。

「う、うぇーい・・・・・・違うな、もっとこう、お腹から声を出してみて・・・・・・・うぇ、うぇーい！あ、ちょっとそれっぽくなったかも・・・・・・」

小さな声だが、どこかの教室からこんな声が聞こえてきた。近くの教室をそーと、確かめてみる。

「これで、私も陽キャの仲間入りに・・・・・・！」

何かいた。小柄の少女が両拳を握っていた。ミディアムぐらいのボブをした、黒髪の少女だ。制服のリボンを見てみると、新入生みたいだ。

その姿が不思議すぎて、凝視しすぎたようで、不注意で扉を開いてしまった。

「ヒッ！あああ・・・・・・」

「えっと、あー」

目の前の少女の目に涙が溜まっていく。いやー、これはまずい。どうしようか・・・。

「す、す、すみませんでしたぁぁぁ・・・」

目の前の少女はいきなり土下座をしてきた。いきなりすぎて、少し呆けてしまった。だが、すぐにマズいと思い、声をかける。
「い、いや、ちょっと待ってくれ。頼むから、まずは顔をあげてくれ」
「なな、何をすればいいんでしょうか・・・」
「話を、話をしよう」
「は、話ですか・・・?すみません、あたし、か、会話すらもままならない、陰キャですので、ど、どうか勘弁を願いたいです・・・はい・・・」
ｏｈ・・・・・ 超卑屈な少女だ。とにかく話だ、俺も会話は得意な方では無いのだが、目の前の少女は俺以上に会話が出来ないタイプっぽい。
ふぅー、やるしかない。
「よし、一旦落ち着こう。ゆっくりでいいから、自己紹介から入ろうか」
「自己・・・紹介・・・・・・・?」
「そうだ、まずは俺からいこう。俺は2年の牡丹だ。佐倉牡丹(サクラボタン)と言う、よろしくな」
「あ、あた、あたあたあたしは、ね、子神(ネガミ)、ビビビ、ビカビカ、ビカラです」
あたとビカが多かった。しかし、名前を知ることが出来た。彼女は子神(ネガミ)ビカラというらしい。
「そうか、ビカラちゃんって言うのか。えっと、ビカラちゃんはこんなところで何を?」
「そ、それはですね・・・・・・。ここで、お、お昼をしようかと・・・」
俺は、そういったビカラちゃんの右手を見る。そこには、白いネズミ柄の袋を持っていた。
旧校舎の人のいない所で、1人で昼食を取ろうとする少女。そして、先程の変な掛け声。なんだか俺は、この少女のことが気に入ってしまったようだ。
「なぁ、良かったらなんだけどさ、昼飯一緒に食べないか?」
「えっ・・・・・・!?」
だから、こんな提案をしてみる。女の子を昼食になんて誘ったこと

は無い。ただ、弁当を一緒に食べようと言っているだけなのに、緊張してしまう。
彼女は驚き、戸惑っている。俺は返答を待つ。
「・・・あ、あたしなんかと、いいんですか・・・・・・・？」
彼女が絞り出したのは、そんな言葉だった。消え入りそうな声で、おずおずと聞いてくる。
だが、そこには踏み出す勇気があった。
「当たり前だ。俺が君と食べたいんだよ」
少し気障っぽいセリフ。上から目線で、背伸びをして格好をつけてみる。
考えたら恥ずかしくなっていき、顔が暑くなる。
「じゃ、じゃあ是非に、お願いしたいです・・・」
「おう」
そこにあった机を並べ、弁当を広げる。
これが、臆病で自分に自信がない少女との出会い。
これは、彼女、ビカラと遊ぶ物語だ。『陰トピア』と遊ぶ物語なのだ。

陰トピアと話そう

ただ、ただ弁当を口に運んでいく。シーンとした沈黙がその場に流れる。

会話が進まない。せっかくだから、何か話すんだ。

「えっと、ビカラちゃんは好きな食べ物とかある？」

こちらも会話なんて得意じゃない。だから何を言っていいのかも分からない。

だから、こんな変な質問になった。

「好きな食べ物ですか・・・・・？あたしは、ち、チーズが好きです・・・」

「チーズかいいな」

返しが下手である。これじゃ、会話が続かない。

えっと、何か話題、話題、話題・・・。あっ、そうだ。

「なぁ、ちょっといいか？」

「は、はい・・・」

「そういえば、どうして旧校舎なんているんだ？」

はじめの出会いが衝撃的すぎて、聞くことが出来ていなかった。滅多に人の来ることの無い、旧校舎で1人だ。そんなの気になるだろう。

「そ、それは、その・・・。教室は少し、い、居場所というか、居心地が悪かったので・・・。たまたまここを見つけて、この場所をお借りしています・・・」

教室は居心地が悪いって、それに居場所がないって言おうとしてなかったか。

もしかして彼女はイジメでも受けているのだろうか？

「・・・なぁ、イジメとか受けてないか？」

「い、イジメなんて・・・。それに、あ、あたしなんか気づかれてないですよ・・・・・・くじけそう・・・・・・」

なんか聞いているこっちが、くじけそうになってくる。気づかれてないってそんな事があるのだろうか？

「と、とりあえず、元気だせって。ほら、チーズやるよ」

「あ、ありがとうございます・・・」
俺は弁当にたまたま入っていたチーズを、彼女に渡す。彼女はお礼を言いながら、少し嬉しそうにそのチーズを齧る。
彼女の機嫌が戻ったようで何よりだ。
途切れ途切れの会話をしていき、段々とビカラちゃんの事が分かってきた。
それに、ビカラちゃんも慣れてきたのか、少しだけ距離が縮まった気がする。
そんなお昼の時間も終わりが来てしまう。あと少しで、午後の授業の始まりだ。
だから、彼女に別れを告げる。
「時間か・・・。んじゃあ、俺はそろそろ行くな」
「は、はい・・・」
「そうだ、また一緒に弁当を食べないか？」
俺たちは学年が違うために、校内で出会える頻度は多くはない。彼女とこれで会いにくくなるのは、なかなかに寂しいもなのだ。
だから、彼女に尋ねる。会える機会を増やすために。
「・・・あ、あたしなんかといいんですか？」
食べる前と同じ質問が飛んでくる。自分なんかといいのか、という質問。
返しは決まっている。だから笑って答えてやるんだ。
「当たり前だ。俺が君と食べたいんだよ」
２度目の気障っぽいセリフ。今度は恥ずかしがらずに、精一杯格好をつける。
「ぜ、是非に・・・！またご一緒しましょう・・・・・・！」
「おう」
彼女の勇気の籠ったセリフ。ほんの少しだけ力強い言葉は、それを表していた。

◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇

〈ｓｉｄｅ　ビカラ〉

（ど、どうしてこうなったんだろう？）
ビカラは戦慄していた。自分が置かれている状況があまりにも唐突だったから。
教室での居心地が悪かった。友人と呼べる人は同じクラスにはいなかったし、人付き合いなんて避けてきた。
だから、この旧校舎を見つけた。人が寄り付かず、落ち着ける場所だった。昼の時間には必ずここへ来て、独りでご飯を食べていた。
寂しい、という想いはあった。だが、自分には現状を変える力なんて無く、無理だと思っていた。だって、自分は陰トピアの住人なのだから。
なのに、ある日突然、その男子生徒はやってきた。
その日は、独りで陽キャになるための練習をしていた。それを、聞かれた。その時は吐きそうになったくらいに焦った。
テンパって、土下座をしてしまった。本当に鬱かった・・・。
「話を、話をしよう」
その男子生徒は、落ち着きながらもそういった。あたしの醜態を見ても、笑わずに蔑まずにいてくれた。
そのまま、自己紹介の流れになった。自己紹介なんて苦手だけど、彼はゆっくりでいいと言ってくれた。
「そうだ、まずは俺からいこう。俺は2年の牡丹だ。佐倉牡丹（サクラボタン）と言う、よろしくな」
彼は先輩だった。同級生よりもハードルが高く感じてしまい、焦りが加速する。
「あ、あた、あたあたあたしは、ね、子神（ネガミ）、ビビビ、ビカビカ、ビカラです」
ああ、やってしまった・・・。噛んだ・・・、もうおしまいだ・・・。
あたしはそう思った。だけど、目の前のこの人の反応は違った。
「そうか、ビカラちゃんって言うのか」
声音は優しく、しっかりと名前を聞き取っていた。この人がいい人だと分かったんだ。
しかし、期待なんてしてはいけない。

あ、あたしは所詮、陰キャだ・・・。この人だって・・・、成り行きで声をかけてくれているだけで、あたしなんかと関わろうとは思っていない・・・・・・。考えただけで、鬱ぃ・・・・・・。

だけど、だけど、この人はあたしにとんでもない言葉を発した。

「なぁ、良かったらなんだけどさ、昼飯一緒に食べないか？」

驚きでよく考えることが出来なかった。この人は何を言っているんだろうと、思った。

こんなあたしと、お昼を一緒に食べようと誘ってきたのだ。

（う、嬉しい・・・・・・！でも、あたしなんかと一緒に食べるなんて、不味くなっちゃうよね・・・・・・。お、お断りしなきゃ・・・・・・）

そう思った。そう思ったんだけど、口に出ている言葉は違った。

「・・・あ、あたしなんかと、いいんですか・・・・・・？」

期待をしてしまった。手を伸ばしてしまった。いくら卑屈になろうとも、ダメだと思っていても、あたしの心は素直だった。

彼は優しく笑い、返答した。

「当たり前だ、俺が君と食べたいんだよ」

あたしとはかけ離れた陽キャのような言葉だ。普段は怖いそんな言葉。だけど、その言葉は嫌じゃなかった。

「じゃ、じゃあ是非に、お願いしたいです・・・」

その言葉に対する、精一杯の回答だ。少し勇気を出した言葉だ。

この勇気の一言で、初めての誰かと一緒にお昼ご飯を食べることになった。

黙々とご飯を口に運んでいく。沈黙が広がっていく。

（な、何か、話さなきゃ・・・・・・！）

沈黙が続くと、不安になってくる。何か話さなきゃいけない感じになってくる。

しかし、それを壊したのは彼だった。

好きな食べ物は何かと、シンプルな質問がとんでくる。たどたどしくも、チーズと答えることが出来た。

会話と呼ぶには言葉数とかが足りない気もするが、会話が出来たことは嬉しく思えた。

彼は会話を続けようとしてくれたし、自意識過剰かもしれないが、あたしの事を知ろうとしているように思えた。
イジメの心配もしてくれて、チーズだってくれた。それらが無性に嬉しくて、彼の優しさが分かった。
彼は陽キャかもしれないが、それでもいい陽キャだと、思えた。
「時間か・・・。んじゃあ、俺はそろそろ行くな」
時間はやってくる。昼の終わりの時間だ。また独りに戻ってしまう。
「は、はい・・・」
だけど、ここで引き止める勇気なんて出る訳が無い。楽しく過ごしたいなんて、高望みは出来ない。
だけど、彼はあたしのこの気持ちを、遠慮なく壊していく。
「そうだ、また一緒に弁当を食べないか？」
その一言がどんなに嬉しかった事だろう。あたしが勇気が出ないのを、出来ないことをやってくれる。彼はやっぱり陽キャだ。
「・・・あ、あたしなんかといいんですか？」
出た言葉はこれだ。今度は、少し期待混じりの言葉。だから、少しだけ手を伸ばす。
「当たり前だ。俺が君と食べたいんだよ」
この小さな期待に、彼は大きく応えてくれる。さっきも聞いた言葉を彼は放つ。
「ぜ、是非に・・・！またご一緒しましょう・・・・・・！」
「おう」
こうして、あたしは約束をした。嬉しさで舞い上がり、なんだかなんだって出来る気がした。
佐倉牡丹さん・・・。ひとつ上の学年の、よ、陽キャで、優しい先輩だ・・・。
今日はなんだか、よく眠れそうだ・・・・・・。

陰トピアと部活動その1

今日も弁当を持ち、旧校舎へと向かう。その途中で友人に声をかけられる。
「お前、最近どこで弁当食べてんの？」
「秘密の場所だよ」
「へー、そっか。なら、詳しく聞こうか」
「後で気が向いたらな」
「それ、向かねぇやつだろ！」
ギャーギャーと騒がしい友人を置いて、教室を出る。いつもの足取りで、旧校舎へと入る。
ノックをして教室に入る。
「こ、こんにちは・・・・・・。ぼ、牡丹さん・・・」
「おう、今日もビカラは早いな」
そこには、既に彼女はいた。これはいつも通りだ。1年生の教室が近い事もあるのだろう、ビカラは必ずここに先にいる。
「じゃあ、いただきます」
「い、いただきます・・・」
彼女は俺と話すのは慣れてきたのだろう。相変わらず自身とかは無いが、だいぶ話せるようにはなった。
「そういえば、ビカラは部活決めたのか？」
「ぶ、部活ですか・・・？まだ、迷っていて・・・・・・」
もうすぐ部活動の体験入部が始まる。この学校では、1年生は部活動には必ず所属しなければいけない。2年生からは自由になるが、1年生のうちは頑張らなければいけないのだ。
なので、目の前の彼女はどうするのか気になり、話題に出してみた。
「迷ってるか。あー、候補とかあるのか？」
「こ、候補ですか・・・？えっと・・・と、特には・・・・・・」
ふむ、どうやら彼女は何も考えていないようだった。しかし、俺はビカラが何部に所属するのか気になるし、心配になっている。
だから、少しからかい混じりに聞いてみる。

「じゃあ、テニス部なんてどうだ？ほら、人がいっぱい集まるし、友だち沢山できるんじゃないか？」
「て、テニス部ですか・・・！そんな、あ、あたしみたいな陰キャが、陽キャが集まるようなうぇーいってした、部活に、な、馴染めるわけないじゃないですか・・・・・・！」
　食い気味な否定だ。てか、うぇーいってした部活ってなんだろう？
　そうか、テニス部はダメか。なら、他の部活だな。
「なら、バスケ部とか、バレー部はどうだ？」
「ど、どちらも陽キャ部じゃないですか・・・。そ、それにチームですよ・・・？あ、あたしがチームの一員になれるはずが、あ、ありません・・・・・。それに、ああ、足を引っ張る未来が見えてます・・・・・」
　またもや新単語登場だ。陽キャ部ってなんだろう？
　しかし、そうか、チームはダメか。なかなかに難しいな。個人技か、うーん。
「よし、じゃあ水泳部だ！どうだ、個人で極めるスポーツだと思うんだが？」
「あ、あたし、お、泳げません・・・・・・・」
「そ、そうか」
　スタートラインがダメだった。人の部活を考えるってなかなかに難しい。うーん、どうしよう。
「あ、あの・・・。ぼ、牡丹さんは何部なんですか？」
「俺か？俺は陸上部だ。ああ、そういえば忘れてたな、陸上部はどうだ？」
　ビカラが自ら質問をしてきた。なんだかそれだけで嬉しくなってきてしまう。
　しかし、自分の部活のことを忘れていたなんてマヌケな話だ。まぁ、でも競技は個人技だし、そこまで陽キャ？してないと思うから、案外いいんじゃないか？
「あ、あたし足が遅いので・・・。」
「いやいや、足が遅くたって大丈夫だって。それに、なんだ、俺もいるぞ？」

「うっ・・・。そ、それは、すす、す、少し魅力的、です・・・・・」
ビカラは俯きながらもそう答えた。少しだけ、前向きに捉えてもらったようで嬉しく感じる。
「見学日って今日からだっけ？」
「そ、そうです・・・。あ、あたしなんかが見学に行っても迷惑だと思うんですけど・・・せせ、せっかくなので頑張ってみます・・・・・」
「まだ、見学だから気楽に行けよ」
「かしこみです・・・・・・」
ビカラが頑張ると言ったのだ、後輩を見守るのが先輩の役目だ。とにかく彼女が望む部活に辿り着くことを祈るばかりだ。
なんだか、今日の部活は気合いが入りそうだ。

◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇
〈ｓｉｄｅ　ビカラ〉

授業が終わり、とうとう放課後が来てしまう。今日は部活動見学が始まる日なのだ。
あたしなんかが部活動が出来るとは思えなかったが、学校のきまりなので所属はしないといけない。うう、鬱い・・・。
３年間日陰で過ごすことにはなりそうだ。それでも、少しでも馴染めるようにはしたい。
あわよくば、仲間が出来ると嬉しい、なんて思ってしまう。
（えっと、どこに行けば・・・・・・？）
部活動の活動場所が記されている紙を見ながら、グラウンドにでる。
そこには、サッカー部や野球部などの運動部が部活動をやっていた。そして、そのまわりには、見学に来ていると思われる多くの１年生たちの姿があった。
（ヒィィ・・・・・・！人が多い・・・。帰りたい・・・・・・。で、でも、ぼ、牡丹さんに頑張るって言っちゃったしな・・・・・・がが、が頑張るぞ・・・・・・）

帰りたくなりながらも、独りで陸上部が練習している所へと向かう。そこには、沢山の見学者が集まっていた。
そこはどこよりも人が集まっているように思えた。
（な、な、なんで・・・・・・こんなに人が・・・。ひ、人が多すぎて前が、見えない・・・。人がいなくなるまで待とうかな・・・・・・）
人集りの外から隙間を探し、頑張って陸上部の練習を覗く。すると、ちょうど見学の生徒たちが色めき立った歓声をあげた。
どうしたものかと、頑張って隙間から覗く。目の前を1人の男子生徒が走っていく。その姿は普段見ているものとはかけ離れていた。
「すげー、佐倉先輩だ！」
「本物だ、本物！」
「カッコイイなぁー！」
走っている姿を見た生徒たちは、そう声を上げた。あたしはその言葉たちで理解してしまった。
（えっ・・・・・・?!も、もしかして、ぼ、牡丹さんってゆ、ゆ、有名人・・・・・・・？）
あんなに気軽に話しかけてくれていた人が、有名人だった。その衝撃は大きく、なんだか今までの事が恐れ多く感じてきてしまう。
それに、そんな有名な彼と毎日一緒にお弁当を食べていると知られたら、何が起こるのか考えただけでも恐ろしく思える。
あたしは何だか、いたたまれなくなってしまい、その場から姿を消した。

陰トピアと部活動その2

走っている時にちらっと確認はしたが、見学に来ている後輩は多くいるようだ。しかし、走っている時はビカラの姿は見えなかった。
彼女の事だ、人集りの外の方に居るのだろう。
「牡丹、お前目当ての新入生が多いみたいだぞ」
「はー、ずるいずるい。お前は有名人だなー」
「さすがは、1年生で全国行っただけの力はあるな」
口々に先輩たちに弄られる。有名だという自覚はあまり無かった。しかし、嫌でもそれは分かってしまう。
有名選手として、取り上げられそこらから広まった。それが後輩にまで届いているとは思わなかった。
「ちょ、やめてくださいよ先輩」
まぁ、ちょっとした有名人だ。少し校内と、大会で知られているだけの存在だ。それでも、話すのが少しだけ苦手な俺だから、話しかけられたりするのはちょっと辛かったりはする。
友だちとかに見せる素ではなく、外面のいいものになってしまう。自分はこうだといった感じではなく、テレビで見るようなスポーツ選手みたいな感じ、そうなってしまう。
それがなんだか、嫌だった。気兼ねなく話したいと思った。
話せばいいと思うのだが、それでも怖いものは怖い。失望されるのがなんだか怖くて、いい人でいたくて、話を合わせるんだ。
友だちは多い。でも、素で話せる人は少ない。
(ビカラはいるのか?)
人集りの近くまで来て、ビカラの姿を探す。しかし、彼女を見つけることは出来なかった。
(あれー、来てないのか。人が多くてやめたのか?)
なんだかモヤモヤしつつも、明日の弁当の時間に聞けばいいかと思い、部活に戻った。
次の日になり、弁当を持って旧校舎へと向かう。ノックをして教室に入るが、そこにはビカラの姿は見えなかった。

「・・・あれ?まだ来てないのか」
そう思い、弁当を開かずにしばらく待っていたが、昼の時間中に彼女が来ることは無かった。
放課後になり、部活動に行く時間となった。しかし、俺は昼の時間の事が気になっていた。
(ビカラどうしたんだろう。体調でも悪かったのか?)
数日間だけなのだが、彼女が来ないなんて事は無かったし、なんなら先に居た。だからこそ、気がかりで心配だった。
ここで、彼女に連絡できる手段を持っていないことが悔やまれる。
ともかく、明日になれば分かると思い、部活動に向かう。今日も部活動見学があるので、絶対に来いと言われている。
荷物を持ち、部室へと向かう。
しかしその道中に、1人の女子生徒の姿を見かけてしまった。その背中は少し丸まっており、下を向きながら歩いている。
見間違える、なんて事は無い。話しかけていいのだろうか、と考える。
学校を休んでいるわけではない無かった、もしかしたら、教室で友だちと食べたのかもしれない。単純に俺が嫌になったのかもしれない。だったら、俺が話しかけるのは避けた方がいい。
だけど、そんなの関係なしに俺は彼女と話したかった。自分勝手で、奔放な理由だし、相手の事を考えていない。
なぜか、なんて分かっている。彼女の事が不安で、心配だ。クラスでちゃんとやれているかいつも気になってしまうし、部活動の事だって話したい。
彼女が自分に自信がない中でも、頑張って話すところをみたい。まぁ、ともかく何とかしなきゃという使命感何てものがあるのかもしれない。
少なくとも俺は、彼女の事を気に入っているし、少し惹かれている、ような気がするんだ。
だからこそ、躊躇わずに1歩前に出る。そして、声をかける。
「よう、ビカラ!元気か?」

「ヒィィ・・・・・・!えっ・・・?ぼ、ぼ、牡丹さん・・・・・・・?」
「おう、牡丹さんだ」
彼女の雰囲気はいつも通りといった感じ。特に体調が悪そうとかは、無いように思えた。だから、少し安心した。
「今日昼来なくて、心配したんだぞ?」
「す、すみません・・・。ちょ、ちょっと体調が悪くて・・・・・・」
「そうなのか、大丈夫か?良くなったのか?」
体調が悪いと聞いてしまうと、心配になってくる。だから、今日は来なかったのか。
「そ、そ、そういう事なので・・・あた、あたしはこれで・・・・・・」
ビカラはそう言って、ここからそそくさと離れようとする。
彼女はここから帰るのだろうか?俺には、少し気になることがあった。
「ちょっと待ってくれ、少し話をしてもいいか?」
「えっと、あたし、お、お手洗いに行きたいので失礼します・・・・・」
「お手洗い、反対側にあるぞ?」
「ひ、引っ込みました・・・・・・」
彼女が向かっている方向とは反対側に、お手洗いはあった。
うーん、これは明らかに避けられている気がする。どうしてだろうか?昨日までは普通だったような気がするんだけどなー。
「あ、あの、それで・・・・・・は、話とはなんでしょうか・・・・・・?」
「部活の見学って行ってるか?」
「い、いえ、まだどこも・・・・・・。一応は、陸上部の方に、お、お邪魔したんですけど・・・昨日は、いたたまれなくなりまして・・・・・」
来てはくれていたようだ。それで、少しは安心した。
だけど、いたたまれなくなったと言っている。もしかしたら、これが俺を避けている原因なのだろう。
だから、出来るだけ原因を突き止め、解消したい。
「俺はもう少しだけ話をしたい。どうだろうか?」
今、解決をするんだ。

陰トピアと部活動その３

〈ｓｉｄｅ　ビカラ〉

牡丹さんについて行って辿り着いたのは、旧校舎の一室。２人でお弁当を食べている場所だ。

あたしが今日、勝手に行くのを辞めたから、牡丹さんは怒っているのだろうか？陸上部の見学をしなかった事を怒っているのだろうか？

でも、牡丹さんはそんな人ではない、と思っている。それに、さっきだって怒っているという感じは無かった。

でも、でも、怒っているのを表に出さないタイプなのかもしれない。

うう、吐きそう・・・。

そんな中、少し時間をあけ牡丹さんが話を切り出した。

「えっと、様子はどうだ？」

聞いてきたのは、ふんわりとした質問。どう答えていいか分からず、固まってしまう。

その様子を見た牡丹さんは、少し慌てたように言葉を続けた。

「あー、えっと、どう言ったらいいのかなー。だー、さっきビカラに避けられてるって感じてさ、何かあったら聞かせて欲しい！」

牡丹さんはストレートに聞いてきた。その気持ちを受け、昨日あったことを話すべきか、誤魔化すべきか迷ってしまう。

それに、牡丹さんとあたしが一緒にいる姿を誰かに見られたら、彼が困ってしまう。こんな陰キャと一緒にいるところなんて、見られたくないだろう。

「あ・・・。そ、その・・・・・・」

お断りを入れる。自分からもう関わらないように言わなければ、彼はあたしに構ってしまう。

でも、でも、その優しさに頼ってしまいたくなる。どうしたらいいのか分からない。

自分では分からないから、人に判断を委ねてしまう。

結局あたしは、全部話した。見学に行ったこと、人気を知った事、迷

惑じゃないかと思った事全部。
ゆっくりと、あたしなりに丁寧に。全部伝えるために、頑張って。
牡丹さんは真剣に聞いてくれた。そして、口を開いた。
「そうか、そうだったのか。全部話してくれてありがとう。俺が迷惑かけてたみたいだな、悪かった」
彼は感謝の後に、あたしに頭を下げてきた。あたしは驚いて、慌ててしまう。
それに、牡丹さんが迷惑をかけていたなんて思っていない。迷惑をかけているのはこっちだ。
だから、謝らなければ。
「俺がビカラに嫌がられているとも知らずに。そうだよな、断りづらかったよな」
悲しそうに牡丹さんが続ける。
違う、そんな事を思ってない。嫌がってないし、断ろうなんて思ってない。
思わずあたしは、牡丹さんの手を取る。驚いた表情の牡丹さん。
「ビカラ?」
「あ、あたしは、牡丹さんと一緒に居られてた、楽しかったです・・・!お昼も、ひ、独りじゃなくて、が、学校が楽しくなりました・・・!だ、だから、で、出来ればもっと一緒に居たいです・・・・・!!」
自分で言っていて、恥ずかしくなってきてしまう。これはもう、もはや、告白だ。
何を言おうか考えていなかったのもある。良く考えればよかったと思ってしまう。
でも、これがあたしの気持である事は間違いがない。
正面の牡丹さんは驚き、少し照れたような表情になった。
恥ずかしそうに、笑った。
「・・・そっか、そうなのか。はー、よかった。そうだな、もっと一緒に居よう」
「ヒィッ・・・・・・・!か、勘弁してください・・・・・・・」
安心したという感じで、牡丹さんがからかうように、笑いながらそ

う言ってきた。
「ははっ、悪い。今度さ、どっか遊びにいこうぜ？」
遊びに誘われたのなんて初めてだ。いつもあたしは独りだった。
友だちなんてあたしが飼っているネズミだけ。その子とは遊んでいたけど、人と遊びに行けるチャンスなんて初なんだ。
ああ、でも・・・
「あたしなんかと、は無しだぜ？」
牡丹さんがあたしの心を読んだかのように、そう言ってきた。
そうだ、牡丹さんはいつもそうだった。優しく、強引で、カッコつけたがりなんだ。
だから、回答は決まってる。
「ぜ、是非に・・・!!」
「よし、決まりだな！」
あたしはこの人と知り合えたよかったと心から思う。
誰にでも優しい人なのかもしれないが、あたしに関わってくれて感謝をしているんだ。先輩で、あたしの友人だ。
「・・・部活、見学行くか？」
「そ、そうですね・・・い、行きます・・・」
「じゃあ、一緒に行くか？」
牡丹さんがそんな提案をしてくる。部活動の時間なんてとっくに始まっていて、彼は部活に行かなければならないはずだ。
だけど、今は彼に甘えてみよう。ほんの少しだけ、勇気と我儘を。怖がらなくても大丈夫だ。
「・・・はい、お、お願いしてもいいですか・・・・・・・？」
牡丹さんは少し驚き、すぐに笑った。
「おう、行こう！」
私たちは、旧校舎を後にした。

陰トピアとトランプ

今日も俺たちは旧校舎の一室で、お昼ご飯を食べている。いつも通りで、普段の事。

だから、いつも通り俺は彼女と会話をする。

「部活動はどうだ？慣れたか？」

「は、はい・・・・・・。み、皆さん、良い人でしたので、な、なんとかやってます・・・・・・」

「そうか、それは良かった」

ビカラが部活動に所属した。何個かの部活を2人で見て周り、ビカラが気に入るものを見つけた。体験入部を経て、彼女は部活動へと入った。

彼女は陸上部には入らなかった。見学はしたが、やっぱり性にあわなかったようだ。

「なんか作ったりしたのか？」

「こちらを、つ、作りました・・・・・・」

そう言って取り出されたのは、小さな白いネズミのぬいぐるみだった。キーホルダーになっており、とてもいい出来だと思った。

「へぇー、これは凄いな」

「あ、あの、良かったら、も、貰ってください・・・・・・！」

ビカラはそう言ってきた。恥ずかしそうに、俯いている。

なんだか、その気持ちが嬉しくてこっちまで照れてきてしまう。

「いいのか？」

「は、はい・・・・・・」

「ありがとう、大事にする」

俺はそのキーホルダーを受け取った。ビカラからのプレゼントが嬉しくて、じっと見てしまう。

見れば見るほどに、彼女の技術の高さが伺えた。これが彼女の部活動での、初作品なんだ。

ここで、彼女の部活についてだ。彼女は陸上部には入らなかった、でも、部活には入っている。

その部活とは、手芸部だ。元々彼女は、服を作ったり小物を作ったりする事をやっていたそうだ。
というよりも、彼女は店員との会話が苦手で、自作で作らざるを得なかったと言っていた。何とも彼女らしい話だ。
部活でも得意な事をやりたく、色んなものを作りたいので、手芸部を選んだ。
見学の時も、体験入部の時も、ガチガチに緊張していて、彼女の言うところの陰キャムーブをしていた。
それでも、手芸部の部員たちは暖かく新入生を迎え入れた。そのため、ビカラもちゃんと馴染めたようだった。
「俺からも何かお礼をしないとな」
「あたしが・・・す、好きで差し上げたので、お、お礼なんて、そんな・・・・・・」
「そう大した事は出来ないんだが・・・何かあるか？」
自分に出来ることは、まぁ少ない。思いつく事も少ない。だから、直接彼女に希望を聞くことにした。
優柔不断で、自分では決められない、なんて思われても仕方がない。面倒かもしれないが、失敗するかもしれないし、ビカラならば、全て受け入れてしまいそうなのだ。
「な、なら・・・・・・！一緒に、と、トランプしませんか・・・・・・？」
「えっ、トランプ？」
驚いて、思わず聞き返してしまう。これは、予想外すぎた。
「す、すみません、わ、忘れてください・・・！な、なんて事をお願いしてるんでしょうね、あたしは・・・・・身の程をわきまえます・・・・・」
こちらの反応を確認したビカラが、早口にそう言ってくる。相変わらず卑屈である。
こちらから、お礼がしたいと言ったのに、どうしてそうなってしまうのか。思わず、笑ってしまう。
「あはははははは！トランプね、いいよ遊ぼう。トランプやろう」
「そんな、い、いいんですか・・・・・・？」

「それくらいなら、いくらでも付き合うよ」
「あ、ありがとうございます・・・！」
ビカラは早速、嬉しそうにトランプを取り出す。慣れた手つきで、トランプをシャッフルしていく。
「なぁ、ビカラ。どうして、トランプがやりたかったんだ？」
これは純粋な疑問。今、トランプを持っていた事もそうだが、彼女はトランプをとてもやりたがっているんだ。
「そ、それは・・・・・ずっとひ、独りでトランプをやっていたので、だ、誰かと、あ、あそ、遊んでみたかったんです・・・・・・」
ずっと独りでって、だから彼女はシャッフルが異様に上手いのか。
「す、すみません、ぼ、牡丹さんなら一緒にやってくれるかなって、お、思ってて・・・・・・」
そうか、俺なら一緒にやってくれるって、思ってくれてたんだな。それならば、１歩前進していると言っていい。
今回のこのお礼の機会を経てだが、彼女から提案してくれた。それが嬉しくてたまらない。
「俺ならいくらでも付き合うよ、どんどんやりたい事をやろう」
「な、なら、バ、ババ抜きを・・・」
「おう、いいぞ！」
勢いよく返事をしたが、ババ抜きって、２人だと簡単すぎじゃね？まぁ、そんな事はどうでもいいか。ビカラがやりたいと言っているんだ。ならば、やろう。
ビカラが、手際よくカードを配っていく。本当に手馴れているのが、なんだか悲しくなってくる。
ともかく、手札を見て揃ったカードを場に捨てていく。
２人でやるババ抜きの途中は、茶番だ。ただ引いて、捨てていくだけ。
ＪＯＫＥＲさえ引かなければ、絶対に揃う。サクサクと試合は進んでいく。
そして、最終局面になる。こっちが２枚、ビカラが１枚。当然、こちらにＪＯＫＥＲがある。

彼女は難しい顔をしながら、カードを選んでいる。
「どどど、どうすれば・・・・・・・」
悩んでいる、悩んでいる。ここがババ抜きの1番盛り上がるところだと言える。
どんなに大人数でも、最後の局面は盛り上がってしまう。そう、1番楽しいんだ。
悩んだ末に、彼女はカードを引く。
「こ、こっちです・・・・・・・!ひっ・・・・!」
「残念、そっちはハズレだ」
2分の1だ、2分の1だと思っていても、何故かＪＯＫＥＲは引いてしまう。この状況は意外と長く続く。
なんだかんだで、俺もかなり楽しんでいるようだ。ババ抜き自体が久しぶりだったし、何よりもビカラと遊べて楽しいんだ。
だから、熱が入ってしまう。勝とうとして、2分の1を真剣に悩む。
カードに手をかざし、悩む。うーむ、どっち・・・に、しよう・・・かな・・・!
彼女の顔を見てみると、汗がダラダラしていて、顔色が悪かった。
かざしている手を、別のカードに移し替える。すると、パァっと明るくなる。
・・・・・・分かりやすすぎるだろ。これは、カードをとっていいのだろうか?勝ってもいいのだろうか?
「悪いな、勝たせてもらう!」
「ああ、そ、それは・・・・・・・!」
俺は少し悩み、顔色が悪くなった方を取る。それは、ＪＯＫＥＲでは無かった。
揃ったカードを場に出して、俺の手札は無くなった。
「あがり、俺の勝ちだな」
「う、うぅ・・・負けました」
ビカラは最後に残ったＪＯＫＥＲを握りしめながら、項垂れる。
しまった。勝負だからと、勝ってしまったがここは負けた方が良かったのだろうか?

そっちの方が彼女は楽しめたのではないだろうか？
俺はそう考えていだが、どうやら彼女は違ったみたいだ。
「誰かと、あ、遊ぶって、とても楽しいんですね」
少し笑みを浮かべながら、彼女はそう言った。
ああ、良かった。そう思ってくれていたなら、良かった。思わずこちらも、笑顔になってしまう。
「おし、もっとやるか？」
「か、畏みです・・・」
ババ抜きは楽しいものだ。２人ではどうかと思っていたが、そうでもなかった。
それは、ビカラとやったからかもしれない。うん、その方がいいな。
ビカラも楽しんだようで、何よりだ。
俺は、もっと、もっと、彼女と色んなことをして遊びたいと思ったよ。
俺たちは、教室でしばらくババ抜きを楽しんだ。楽しみすぎて、授業に遅れそうになったのは、いい思い出だな。